

追悼 三根谷 徹先生

大 島 正 二

永年に亘り日本言語学会の評議員を務められた三根谷徹先生は、平成12年(2000)9月5日午前0時37分、東京都世田谷区の病院において急性呼吸不全のため他界された。享年80才であった。

先生は大正9年(1920)3月7日に東京の麴町でお生まれになり、府立第一中学校、静岡高等学校から東京帝国大学文学部言語学科に進まれ、昭和18年(1943)9月に卒業、その後は同大学院特別研究生、東京大学文学部助手、講師、助教授、教授を経て昭和55年(1980)に停年退官、名誉教授となられた。退官後は国学院大学文学部教授に就任、平成2年(1990)に退職されるまで引続き後進の育成に当たられた。昭和60年(1985)から64年(1989)の間は同大学院委員長、文学研究科委員長をも務められた。

この間、先生は昭和29年(1954)から翌年にかけて、ミンガン大学極東言語文学科の講師として、また昭和35年(1960)にはサイゴン大学附属現代語学校の教師として赴かれ、学殖を一層精密にされたのであった。また財団法人東洋文庫研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所運営委員、国語審議会委員、大学設置審議会専門委員など数々の要職にも就かれ、平成6年(1994)には勲三等旭日中綬賞を受賞された。

先生の学問的業績には、大別してベトナム語と中国音韻学の研究がある。学殖は豊富で極めて緻密、その知見は深くかつ広いにもかかわらず、先生はご自身の研究成果を多く公にされなかった。学史的にも価値が高いと思われる『「安南譯語」の研究』(東京帝国大学文学部言語学科卒業論文、1943)もその一つである。何事に対しても慎重であられたお人柄にもよるのであろうが、残念である。

平成5年(1993)、喜ばしいことに先生の主要論文が一書にまとめられた。その書名は『中古漢語と越南漢字音』(汲古書院)、平成7年(1995)、先生はこの

業績によって映え有る日本学士院賞、恩賜賞を受賞された。われわれが細やかなお祝いの会を持った折の、やや気恥しげな先生の温顔が忘れられない。

参考のために、この書に収録されている文献を、その刊行年代順に以下に示す。

1. 軽唇音化の問題 (『中国語学』27号, 1949. 6). 中国語学研究会関東第2回例会 (1949. 5. 29) における研究発表の要旨.
2. 韻鏡の三・四等について (『言語研究』第22・23号, 1953. 3. pp. 56-74)
3. 韻鏡における歌 (戈) 韻の位置 (『東洋学報』第35巻3・4号, 1953. 3. pp. 81-99)
4. 安南語の声調の体系について (『金田一京助博士古稀記念 言語・民族論叢』1953. 3. 三省堂, pp. 1017-1040)
5. 中古漢語の韻母の体系——切韻の性格—— (『言語研究』第31号, 1956. 3. pp. 8-21)
6. ヴェトナム語における中国語および漢字の影響 (『言語生活』第129号, 1962. 6. pp. 52-55)
7. 韻鏡と越南漢字音 (『言語研究』第48号, 1965. 11. pp. 13-22)
8. 漢字からローマ字へ——ベトナムの文字—— (『月刊百科』70, 1968. 6. pp. 15-16, 25, 28)
9. 『越南漢字音の研究』(東洋文庫論叢第53, 1972. 3)
10. ベトナム語の十二支 (『国語研究』第33号, 1972. 3. pp. 81-85)
11. 漢字からクォク・グゥへ (『朝日アジアレビュー』19, 1974. 9. pp. 146-151)
12. 唐代の標準語音について (『東洋学報』第57巻1・2号, 1976. 1. pp. 01-016)
13. 宋代等韻図の構成 (『東洋学報』第60巻1・2号, 1978. 11. pp. 01-016)
14. 韻鏡と中古漢語 (1981・1984年の国学院大学文学部「国語学特殊研究」講義ノート「韻鏡新講」を改題したもの)
15. 「韻鑑序例」考 (『国学院雑誌』第83巻11号, 1982. 11. pp. 313-320)

この他、先生の著作には、ベトナム語の概論として定評のある「安南語」(市河三喜・服部四郎共編『世界言語概説 下巻』研究社, 1955. 所収) や辞典類に

ご執筆のものなどがあるが、上掲諸篇の内、圧巻は『越南漢字音の研究』である。本篇は、東洋文庫論叢第53を底本として、誤植・誤記等の訂正を施した上で、旧版のままを縮小・複製したもので該書公刊後になされた中古漢語の韻母の体系についての解釈の変更に伴う改訂部分は、補注として附載されている。その全体は、「本文」pp. 221-391、「越南漢字音対照表」（自筆原稿）pp. 393-495、「中古漢語索引」（自筆原稿）pp. 497-523、「補注」pp. 525-527 から成る。

先生は、ベトナムにおける中国語音の受け入れ方を通じてベトナム語の音韻史の解明を目指された。同じ漢字文化圏の中にあつて、日本や朝鮮に比してベトナムの漢字音資料は極めて限られている。その少ない資料を駆使して、ベトナム漢字音の沿革をこの書で見事に描き出されたのである。

その本文は全5章（Ⅰ. 序説、Ⅱ. 越南漢字音の資料、Ⅲ. 中古漢語、Ⅳ. 中古漢語と越南漢字音、Ⅴ. 越南漢字音の成立）から成るが、三根谷音韻学とも称すべき、その精粹が余すところなく提示されているのが第3章である。先生は〈切韻系韻書〉の反切に反影する中古音の体系と、中古音を考える上で参考資料となる『韻鏡』の体系との間にあるずれを重く見て、多くの人が珍重する『韻鏡』を離れた韻母の分類を試み、独自の体系を示された。これは、先生が『韻鏡』なるものの本質を完全に把握していたからこそ始めて可能だったと言える。

続く第4章では、前章で示した中古音の音韻体系と越南漢字音とを対照し、第5章では中古音との対照を通して越南漢字音の基本的体系を見出し、その成立の由来・特徴などについて説き、越南漢字音は、日本および朝鮮の漢字音と軌を一にして、ただ一度の波で導入されたものではなく、その主層は唐代音（慧琳音）を基礎としていることを論証している。これは、越南漢字音の実相を始めて解明したもので、不滅の業績である。

三根谷徹先生は、文字通り温厚篤実で真にダンディーな方だった。孫過庭の草書を好まれた先生の、その流麗な筆はつとに広く知られている。お酒を愛でられ、私共もたびたびお伴して楽しい一時を過ごさせていただいたが、それも現世では二度と叶わなくなってしまった。寂寞の一言では言い尽せぬ思いで一杯である。

平成12年9月8日、先生は東京・築地の法重寺から多くの方々に見送られながら冥界へ旅立たれた。法名は清明院釋徹眞居士。今はただ謹んで先生のご冥福を

お祈り申し上げる他にないのが無性に哀しい。

追記：長年、三根谷先生の学究生活を支えて来られた令夫人の寿代様が、先生の後を追われるかのように11月7日に急逝された。享年73。先生の四十九日法要を10月22日に滞りなく済まされた奥様は、寂しがり屋でもあった先生の下に急ぎ赴かれてしまった。お好きな生花に包まれたお姿はまことに美しく安らかであった。今は先生との再会を果され、身の回りのお世話をなさっていることであろう。ここに、強い絆で結ばれたお二人のご冥福を改めてお祈り申し上げる次第である。校正に際し、深い悲しみとともに追記する。